



鶴岡市・にかほ市・由利本荘市 3市連携交流企画 第1弾

由利本荘
にかほ
鶴岡

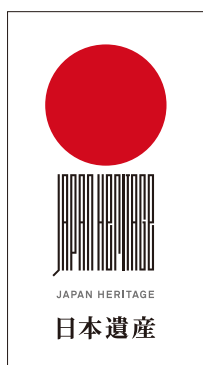


● 日本遺産 ●

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
—北前船寄港地・船主集落—

2023年2月11日(土)～4月9日(日)

会場：致道博物館内 旧鶴岡警察署庁舎 1階ホール



「日本遺産」(Japan Heritage)は地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーとして文化庁が認定するものです。

ストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

主催：公益財団法人致道博物館
共催：鶴岡市北前船日本遺産推進協議会
協力：秋田県にかほ市教育委員会
秋田県由利本荘市教育委員会



致道博物館
CHIDO MUSEUM

山形県鶴岡市家中新町10-18 ☎0235-22-1199



JAPAN HERITAGE
日本遺産

日本遺産 STORY #039

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～



江戸時代、蝦夷地（北海道）・東北・北陸と西日本を結んだ西廻り航路は経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は北前船と呼ばれました。北前船は、米をはじめとした物資の輸送から発展し、船主自身が寄港地で仕入れた多種多様な商品を、別の寄港地で販売する「買い積み方式」により利益をあげました。そのため現代では「動く総合商社」と称されることがあります。

北前船の壮大な世界を今に伝えるのは、寄港地や船主集落です。日本海や瀬戸内海沿岸には、山を風景の一部に取り込む港町が点々とみられます。港に通じる小路が随所に走り、通りには広大な商家や豪壮な船主屋敷が建っています。社寺には奉納された船の絵馬や模型が残り、京など遠方に起源がある祭礼が行われ、節回しの似た民謡が唄われています。荒波を越え、動く総合商社として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船寄港地・船主集落は、時を重ねて彩られた異空間として、今も人々を惹きつけてやみません。

「北前船」とは？ 定義と歴史

江戸時代中期から明治30年代にかけて、大量の荷物を積んで日本海を往来した船のことです。研究者により定義に違いはありますが、次のことが共通しています。

- ①大坂と蝦夷地を「日本海まわり」で往復していた。
- ②寄港地で積荷を売り、新たな仕入れもした。
- ③帆船である。

寛文12年（1672）、幕府は江戸の商人・河村瑞賢へ最上川流域にあった15万石の天領（幕府の領地）の米を運ぶ航路の整備を命じました。河口の酒田から江戸へは、津軽海峡から太平洋岸を航行する「東廻り」が近いのですが、危険な海域が続きました。そのため瑞賢は、超長距離の「西廻り航路」を整備しました。

実は、北前船の最盛期は明治時代になってからです。江戸時代、松前藩は松前・江差・函館しか廻船の入港を許可しませんでした。明治3年からは、どこの港でも交易できるようになり、西洋式帆船などのように、船の改良が進んだことも理由のひとつと考えられています。

しかし、電信技術の発達により、船頭でなくとも流通や価格の情報が得られるようになります。明治24年には東京―青森間の東北本線が全通し、大量の荷物を陸路で安全に輸送可能となったのです。さらに、汽船が普及しはじめ、明治30年代になると北前船はどんどん姿を消していきました。そして、日露戦争によって北海道周辺の海が危険になり、北前船の歴史にピリオドが打たれることとなりました。

日本海に春を告げる「北前船」

強い西風が吹き荒れる冬の日本海。1枚の帆に風を受けて走る船は、冬の海は航行できません。波が穏やかな春になると、北前船が姿を現します。

綿花が育たない北陸や東北では貴重な木綿の糸、織物やその古着、蝦夷地では作れない米、酒などを積み大坂を出発しました。瀬戸内各地では塩、染料の藍、イグサの畳表、御影石を積み、山陰、北陸、東北の港では鉄や紙、ロウソクなどを積み込んで航行しました。

日本海沿岸の人々にとって、これら物資は待ち遠しく、北前船は春の到来を告げる船でもあったのです。

一攫千金の夢「北前船」

江戸時代、荷物を運ぶ船を「廻船」と言いました。大坂から江戸へ向かう航海が最も多く、何でも運ぶ「菱垣廻船」や酒樽を運ぶ「樽廻船」などがありました。一年中、何度も往復して大量の物資・生活必需品を運びましたが、帰りに積む荷はなく、寄港地も少なかったため、片道運賃で稼ぐしかありませんでした。

北前船では、寄港地で安いと思う品物があれば買い、高く売れる物を売りました。地域間での価格差を見きわめ、「商売」で利益を得ながら往復しました。米を1千石（150ト）積める「千石船」で大坂と蝦夷を1往復すると、1千両（現代では6千万円～1億円相当）もの利益が得られたといえます。

風待ち港を発展させた「北前船」

日本海沿岸には、荒天時に逃げ込む小さな湾や入江が多くあり、「風待ち港」と言います。現代の感覚では「小さな漁港」の広さでも、外海の荒波を防ぐ地形の湊は貴重でした。北前船との取引だけで商売が成り立ち、廻船問屋や商家、蔵などが建ち並び、繁栄しました。

さまざまな文化も運んだ「北前船」

北前船は生活必需品に加え、雛人形などの高級品や「文化」も各地へ運びました。天候次第の航海は「風待ち」という文化を生み、料亭や茶屋で唄われる民謡や各地の芸能が、船乗りたちによって伝わりました。

危険を伴う航海は神仏に庇護を求め、格調高い神社仏閣への信仰に表れます。安全を祈願した船絵馬や船模型が奉納され、石灯籠や石像も寄進されました。

和食の代表「昆布だし」の食文化も生まれ、優れた食は各地へ広がりました。ほかにも、凍結に強い赤瓦が運ばれたことで北国の防災力が強化、綿の肥料となるニシンや古着が行き交い、衣服の質が上がりました。

北前船は、日本人の衣・食・住の全般において生活環境向上に大きな役割を果たしたといえるでしょう。

鶴岡

城下の生活物資を陸揚げする
重要港・寄港地

～加茂湊～



鶴岡市は、鶴岡市(旧)・藤島町・羽黒町・櫛引町・朝日村・温海町が合併し、平成17年10月1日に鶴岡市(新)が発足しました。新市の当初の人口は13万3千人で県内では2番目、面積は1,311.53km²で東北では一番広い市となりました。

山形県庄内地方は、源を異にする最上川と赤川に育まれた庄内平野が広がり、北に秀峰鳥海山、東に出羽三山(羽黒山、月山、湯殿山)、南は朝日連峰の山々に囲まれ、日本海に面した西側には大砂丘がひらける、日本有数の穀倉地帯です。鶴岡市は庄内地方の南部一帯であり、また、全国最多となる4つの国指定国民保養温泉地を有します。

また、江戸時代の藩主酒井家が今も住み続ける国内でも珍しい城下町で、歴史・文化・自然に恵まれた魅力あふれる地域です。平成26年には日本で初めて「ユネスコ食文化創造都市」の認定を受けました。山・里・川・海に抱かれた四季折々の恵み豊かな環境の中で育まれた独自の食文化が、世界に認められています。

なお、鶴岡市は3つの日本遺産を有しており、北前船のほかに、生まれかわりの信仰の山「出羽三山」、日本で唯一絹産業の主要工程が現存する「サムライゆかりのシルク」が認定されています。



江戸時代、庄内藩最大の湊は酒田ですが、城下町鶴岡にも寄港地が点在しました。越後からの関門、鼠ヶ関は小さな湾で、藩の番所がありました。

そこから北上した加茂湊は、荒波や強風を避けるための「かかり潤」で、城下の生活物資を陸揚げするための重要港でもありました。

湾に面して30軒以上の廻船問屋が並んでおり、加茂からは、米や酒などが積み込まれ、塩・砂糖・古着・紙などが買い付けられました。積み荷は加茂坂峠新道を通り、城下はもちろん、大山や農村部、最上川を溯って内陸にまで運ばれました。また、大蔵村の永松鉦山産出銅が清川までの川舟の後、大山経由の陸路で加茂に運ばれ、大坂まで送られていました。

明治時代後期には近代港湾として大規模改修工事が行われ、大正時代に羽越線が全線開通するまで、活況が続いたといわれます。

加茂から鶴岡へ向かう途中の古刹・善寶寺には、北前船の船頭も参拝に訪れました。奉納された様々な品が遺されています。

日本遺産の構成文化財



①加茂港周辺の町並み(左:岡町川、右:加茂地区遠景)



②石名坂家住宅主屋・蔵 (国登録有形文化財/建造物)

③浄禅寺の釣鐘



④善寶寺五百羅漢堂 (国登録有形文化財/建造物)



⑤致道博物館所蔵の北前船関連資料群

にかほ ～塩越湊・金浦湊・三森湊・平沢湊～



市の概要

にかほ市は、仁賀保町・金浦町・象潟町の3町が合併し、平成17年10月1日に誕生しました。秋田県沿岸部南端に位置し、南に鳥海山、西に日本海を望む、山と海に抱かれた風光明媚なまちです。

南北に約23km、東西に約17kmひろがり、面積は約241.13km²あります。秋田県内では降雪量が最も少なく、春の訪れが最も早い温暖な地域として知られます。

鳥海山の山すそが海岸近くまで延び、人口は海岸沿いの平野部に集中しています。そのため、鳥海山と日本海の豊富な自然と、製造業を中心とするハイテク産業が融和するまちでもあります。市内を国道7号と日本海東北自動車道、JR羽越本線が走り、秋田県南西部の玄関口となっています。



北前船の歴史

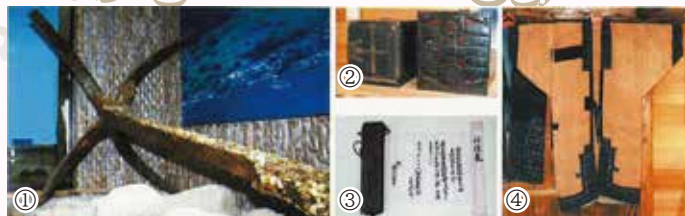
にかほ市の塩越湊、金浦湊、三森湊、平沢湊は、江戸時代中期から明治時代中期にかけて大坂と蝦夷地（現北海道）を往来していた北前船の寄港地です。

本荘藩領であった塩越湊は、大潤、小潤、鰐淵の総称です。一番大きな大潤では、沖に千石船を12艘繋留できたことあり、領内屈指の活気ある湊でした。大坂や松前へ米が運ばれ、塩・海産物・砂糖・織物などが運び込まれました。とりわけ北海道との交流はどの地域よりも盛んで、今も多くの文物が遺っています。湊の周辺には11の神社があり、それぞれに船絵馬が残っています。

金浦湊は本荘藩最大級の漁港ですが、北前船の風待ち湊としての設備も備えていました。江戸時代後期に描かれた「由利南部海岸図」を見ると、金浦湊に停泊する小廻り船や、金浦郷と西小出郷の年貢米を保管する御蔵が確認できます。日本人初の南極探検家・白瀬矗（しらせ のぶ、文久元年-昭和21年）は金浦出身です。沖の北前船や頻繁に行き交う小廻り船を常に目の当たりにしており、そのことも探検家を志すきっかけになったのではないかと考えられています。

仁賀保地域にある平沢湊と三森湊は、いずれも地形的な条件は十分ではなかったものの、船持ちを含め多くの廻船問屋がありました。沖に停泊した船との直接取引が盛んで、三森湊の近くには日和山のえびす森、山王森があり、双方に方角石がありました。石には方位が刻まれており、出港の際に風や潮を確認するために使用しました。にかほ市内には7個の方角石がありますが、秋田県内では他に能代に1個あるだけで、全国でも50数個しか確認されていません。

日本遺産の構成文化財



①象潟郷土資料館 北前船関係資料

掲載画像資料名

- ① 四爪碇 ② 船簞笥 ③ 船往来手形
- ④ アットゥン(アイヌの民族衣装)
- ⑤ 江戸時代後期に描かれた「象潟図屏風」(紙本着色、県指定有形文化財)



②由利南部海岸図(駿鶴)



③沖の棒杭



④塩越湊周辺の船絵馬群



⑤金刀比羅神社のまげ絵馬



⑥日枝神社の山王鳥居と山王猿像(左:「阿形」、右:「吽形」)



⑦飛良泉本舗



⑧高昌寺弁天丸(市指定有形民俗文化財)



⑨にかほ市内の方角石(市指定)

由利本荘

子吉川をはさんで栄えた
二つの北前船寄港地

～古雪湊・石脇湊～



市の
概要

由利本荘市は、本荘市・矢島町・岩城町・由利町・大内町・東由利町・西目町・鳥海町の1市7町が合併して、平成17年3月に誕生しました。秋田県内最大の面積の市で、その広さは神奈川県の半分に相当します。

南には山形県との境を接する標高2,236メートルの霊峰鳥海山、東には秋田県の中央を南北にのびる出羽丘陵が位置します。中央部には鳥海山を水源とする子吉川(流域面積秋田県第3位)が流れており、日本海へと注がれます。

地域は大きく分けて3地帯、①鳥海山と出羽丘陵に接する山間地帯、②子吉川流域地帯、③日本海に面した海岸平野地帯で構成されます。日本海に面した沿岸部と山間部の内陸部では、夏の気温や冬の積雪量などの気候条件も異なり、山・川・海の四季折々の豊かな自然に恵まれています。



北前船
の歴史

江戸時代、由利本荘市は北から亀田藩岩城氏、本荘藩六郷氏、矢島藩*生駒氏が治めていました。そのため子吉川河口には、川をはさんで石脇湊(亀田藩)、古雪湊(本荘藩・矢島藩)の2つの湊が設けられました。

石脇湊がある石脇は、亀田藩2万石の藩米を扱う役所や米蔵がおかれ、明治時代半ば頃までは、子吉川や支流の芋川の河川交通を介する物流拠点でした。

古雪湊は、文禄年間(1593～1596)には湊として広く知られていました。江戸時代前期から幕末にかけては、「廻船問屋十人仲間」と呼ばれる本荘藩公認の株持ち問屋が活躍しました。

廻船問屋はそれぞれ取引する船が決まっていました。取引先の帆印を確認すると直ぐに、迎えの小舟を出したといわれます。入札など入港時の規則もありましたが、川をはさんで2つの湊があったため、新規の船の入港時、船を取り合う争いがおきることもありました。

北前船輸送は、明治時代半ば頃には全国的に衰退していきます。しかし古雪湊の物資の移出入の売上高は、40～830倍と飛躍的に伸びました。大正7年(1918)の船便による県産米の移出率は、秋田県内の港で最も多くなっています。ただし、汽車便による輸送は船便を上回っており、大正11年の羽後本荘駅開業時をピークに、古雪湊は北前船寄港地としての終焉を迎えました。現在は「本荘漁港」として、その役割を果たしています。

※矢島は旗本領ですが、家格と幕末の経緯から、ここでは藩と称します。

日本遺産の構成文化財



①古雪の町並み



②新山(日和山)



③新山神社奉納物(左:石鳥居、右:石灯籠とその陰刻)



④石脇湊の御番所跡(左:大渡口※上流側、右:西ノ口※河口側)



⑤石脇絵図



⑥石脇の町並み



⑦稲荷神社



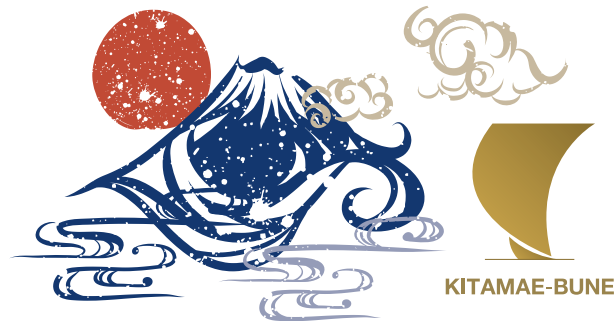
⑧石脇さんぶつ(北前船の船乗りたちが石脇湊に伝えた儀式唄)



⑨本荘八幡神社奉納物(豊後花霜) ⑩松ヶ崎八幡神社石製狛犬(豊後花霜)



⑪本荘郷土資料館資料群 ⑫宮下神社の船絵馬



鶴岡市・にかほ市・由利本荘市 3市連携交流企画

開催施設のご案内

本企画展は、北前船寄港地という共通した歴史背景をもつ3市3館が連携し、3年にわたって開催します。開催時期や展示内容は、各館で変わります。この機会に、ぜひ各市の日本遺産・北前船の構成文化財を巡って、それぞれの地域の特色に触れ、その魅力を体感していただけますと幸いです。

【第1弾】令和4年度開催 致道博物館（山形県鶴岡市）



所在地 山形県鶴岡市家中新町10番18号
☎ 0235-22-1199 開館時間 9:00～17:00
休館日 12～2月の水曜日(16:30閉館)、年末年始



北前船関係資料は「民具の蔵」で常設展示しており、加茂・春日神社に奉納された北前船模型や、善寶寺奉納絵馬、3種類の船簞笥などをご覧ください。このほか、考古・歴史・民俗・美術工芸などの多分野にわたる資料や作品、酒井家伝来の文化財を豊富に展示し、庄内の歴史と文化を広く紹介しています。

【第2弾】令和5年度開催予定 象潟郷土資料館（秋田県にかほ市）



所在地 秋田県にかほ市象潟町字狐森31番地1
☎ 0184-43-2005 開館時間 9:00～17:00
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始



象潟郷土資料館では、にかほ市の北前船関係文化財のほか、地震による隆起前の象潟を描いた「象潟図屏風」をはじめ、2,500年前の山体崩壊で地中に埋没した「埋もれ木」、松尾芭蕉『おくのほそ道』関係の資料を紹介しています。また、令和4年に本市象潟町出身の木版画家・池田修三が生誕100年を迎えたことから、記念企画展『暮らしを彩る木版画』を令和5年5月21日(日)まで開催しております。

【第3弾】令和6年度開催予定 本荘郷土資料館（秋田県由利本荘市）



所在地 秋田県由利本荘市石脇字弁慶川5
☎ 0184-24-3570 開館時間 9:00～17:00
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始

本荘郷土資料館は、地域の歴史を深く学び、地域の未来を創造するため、私たちの祖先が残した生活の様子や精神的な営み(文化)を学び、残されたさまざまな歴史・民俗資料などを調査収集し、これらの資料を保管する施設として旧本荘北中学校跡地に建てられたものです。

資料館では収集した資料を広く公開し、市民や本市を訪れる方々に本市の歴史や文化を紹介するほか、児童生徒の学習の場としても利用されています。また、周囲は石脇公園となっており、四季折々の草花を楽しむこともできます。

